天武と持統

歌が明かす壬申の乱

李寧熙

文藝春秋

天武と持統

歌が明かす壬申の乱

李寧熙（イ ヨンヒ）

馆书图
章

文藝春秋

© Young-hee Lee 1990
Printed in Japan

版権代行・編集協力
(有)ペン・エンタープライズ

天武と持統——歌が明かす壬申の乱
一九九〇年十月一日発行　第一刷

著者　李(イ)寧熙(ヨンヒ)
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三—二三
電話 (〇三) 二六五—一二一一
印刷　大日本印刷
製本　加藤製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします
定価はカバーに表示してあります

ISBN 4-16-344670-2

天武と持統——歌が明かす壬申の乱

装幀・玉井ヒロテル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目　次

はじめに

第一章　天武は高句麗の将軍か　13

「吉野」とは

「耳がの嶺」を訪ねて

時を窺う

天武は淵蓋蘇文？

童謡（わざうた）「吉野の鮎」

「水のお偉いの」

第二章　親殺しを嘆く　85
天武天皇と綏靖天皇
額田王の慟哭
「乃」か「乃」か
目撃者の歌か
第三章　おそるべき「政治家」、持統女帝　141
「智男雲」
女帝のプロフィル
五十鈴依媛と持統
神功皇后と持統
文武天皇の謎

第四章　「吉野通い」の謎解き　189
「あんまり」な吉野通い
弓削皇子の痛評
「三井寺（園城寺）」の謎
不思議なお墓
恋ふらむ鳥
持統の恋のお目あて「武」
文武天皇は誰か
第五章　原詩と用語解説　245

おことわり

『万葉集』訳読のテキストとしては『新版・新校万葉集』（創元社）『日本古典文学大系』（岩波書店）、引用の万葉仮名と従来の訳文は、原則として『日本古典文学全集』（小学館）により、対比文献として『日本古典文学大系』（岩波書店）を引用しました。

『日本書紀』の引用文献としては『日本古典文学大系』（岩波書店）、『古事記』の引用文献としては原則として『日本古典文学全集』（小学館）、対比文献としては主に『日本古典文学大系』（岩波書店）を用いました。

はじめに

カラスの羽に書かれた墨字のメッセージ

六世紀後半、敏達天皇の時のこと。

ある日、高句麗から天皇あてに国書が届きます。しかし、黒いカラスの羽に黒い墨字で書かれた手紙なので、誰もそれを読み取ることができません。

どうしたものかと朝臣一同が慌てふためくところに、船史の王辰爾なる人物があらわれ、まずカラスの羽を御飯の蒸気で蒸します。その羽に柔らかい絹の布を押しあてて字を写し出し、国書を読みとることに成功したというのです。

この『日本書紀』の記述はまことに示唆的です。

『万葉集』は、そして『古事記』『日本書紀』『風土記』の万葉仮名表記部分は、まさにカラス

の羽に書かれた墨字のメッセージなのです。「写し出す術」を識らなければ、メッセージは永久に暗い沈黙の闇に沈むしかありません。

しかし、その「術」というのが、カラスの羽の場合のように、すぐれて創意的ではあるものの、難渋きわまる「学問」に属するものでなかったことは幸いでした。

漢字を一応日本式音よみまたは訓よみでよませ、そこから生じる音声を古代韓国語にあてはめるという表記法がそれです。換言すると、古代韓国語を、「日本式音・訓よみによる漢字」を借りてあらわしているということなのです。

このような書かれ方の『万葉集』や「上代歌謡」などを、従来の「万葉仮名よみ」なるものにしたがって、つまり一字一音の訓み下し方にだけ頼って無理矢理日本語としてよんできたので、まったくらちのあかないフワフワ・モヤモヤした歌として現在に伝えられているのです。音・訓ゴッチャマゼなんて可笑しい……と、中世韓国語専門の日本のある言語学者が言われたそうですが、私はこの方の「専門知識」に、多いなる失望を覚えざるを得ません。

漢字の音と訓とを徹底的に混用して幅広く古代韓国語をあらわした借字文が「吏読」（郷札とも呼ばれた）なる表記法であるからです。そして吏読は、中世の韓国においても公文書などに大いに用いられていたのです。

この世界に類ない独創的借字文である吏読表記の技術を導入して、より簡明に、当時の言葉を表記しようとしたものが、「万葉仮名」の名で識られている「日本式吏読」です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しかし、この表記法の難点は、日本式漢字の音・訓のみならず、吏読のように韓国式音・訓まで一部活用してことばをあらわしているところにあります。しかも『万葉集』の場合、詠まれた時期や作者によって各々少しずつ異なる表記法を駆使してもいます。また後期の歌や『記・紀』は、主に一字一音で表記されています。――こ多様性が悩みの種です。

世界の各国語が確として固まっている現代の常識からすると、奇想天外とも、自由奔放とも見えるこの借字法も、四世紀から八世紀にわたる韓国と日本の、いとも流動的かつ多岐的な漢字のよまれ方からすると、むしろ当然であったと思われないでしょうか。

まかふしぎなこの借字法を否定するかぎり、千二百年前に書かれた日本の古文献を判読するということは、これからまた千二百年かけても不可能でしかありません。

そして、この訓み方によって『万葉集』をよむと歴史が見えてきます。

特に、韓国の古代国家（高句麗（ゴクリ）・百済（ペクジェ）・新羅（シラ）・伽倻（ガヤ））の勢力と日本が濃密にからみあい、どろどろとした権力争いをくりひろげていた時代、あの謎だらけの七世紀後半の真相が見えてくるのです。

これが驚きでなくてなんでしょう。

『万葉集』は文学であるばかりか、史書でもあるのです。正しくいえば、『記・紀』『風土記』などの歴史書を、生き生きと裏付けし、また、その歪曲部分を是正もしてくれる、すばらしい「証拠文書」であるとせねばならないでしょう。

私は、本書によってそれを実証しようと努力しました。

『万葉集』を訓み解く、そして『記・紀』を読む、韓国の古史書『三国遺事』と『三国史記』、中国の歴史書も併せて読む……これを丹念に繰り返し、北東アジア的フォーカスから人物相互の関係を洗っていくと、何とそこに現われるのは、私たちが探し求めて止まなかった霧の中の歴史の真の姿であるのです。私は、これを「もう一つの古代史」と名づけようと思います。

『書紀』の記述は、ある明確な意図のもとにストーリーをふり分け、そして引き延ばして書かれているようです。

つまり、時の為政者に都合の悪い部分は、架空の天皇を創り、その天皇の物語として振り分けられたのです。

こうして創造された人物を継ぎ足し、押しあげるようにして築かれた歴史が、戦前の「紀元は二千六百年」であるわけです。

例えば、第四十代の天武天皇の行跡は、第二代の綏靖天皇条と、また第十四代の仲哀天皇条と仲哀の皇后に関する神功皇后紀などに分散記述されています。天武条に書かれていないことが、ここに記されていると思われるのです。

つまり、綏靖紀には天武が天智を殺害している経緯が、仲哀紀と神功皇后紀には、天武天皇が急死している事実がきちんと分載されているのです。

『書紀』は、ある意味においては非常に正直であるといえます。推理小説的ヒントをふんだんに与えることで、史実を「告白」しているのです。

架空人物の名前が重要なヒントの一つです。

天武天皇のおくり名と綏靖天皇のおくり名はぴったり同義であり、綏靖天皇皇后と仲哀天皇の后であった神功皇后の幼名は、天武天皇のお后であった持統天皇の出身をあらわすことばとつながります。

第四十代の天武と、第十四代の仲哀……などとしているあたりも偶然とばかり思われない「作為」に見えるのですが……。

ともかく、今回はこの天武天皇と持統天皇を中心とした、壬申（じんしん）の乱前後の歌ときに照明をあてることにしました。

『万葉集』や「上代歌謡」などの歌を『記・紀』とあわせ訓むことによって、また『記・紀』にあらわれる人物の名前や、地名などが意味するものを解くことによって、衝撃的な史実が明るみに出てくる過程をご覧になってください。

ことばの説明をより明快にするため、日本語の語源についても相当ふれておきました。古代韓国語から日本語になっていることばは、想像以上の広範囲に亘っている事実を、多少とも御

理解いただければ望外の喜びです。

いずれ、日本語の語源に関するお話も、まとめて書いてみたいと思っています。「不詳」「未詳」または「誤推」だらけの日本語の語源集などを見る度に、なんとも悲しい思いに駆られます。

最後に、私の古代史探険の旅に、いつも正確な地図を拡げて下さる小林恵子先生（日本古代史）に深謝、向後ともよろしくお願いする次第です。

一九九〇年六月一日

李寧熙

第一章

天武は高句麗の将軍か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.